

観音さまのお姿は、日本では近年実にお優しく柔和に成られました。古来、観音さまのお顔は凜々しく、高い所から私達を見守って下さる様な表情をされていました。今でも仏師のかたは古来のお姿をお手本として観音さまを彫っています。

観音さまは、^{かんぜおんぼさつ}観世音菩薩を略した呼び名の通り、この世界に生きる私達の、声に出せない苦しみ、誰にも打ち明けることの出来ない悩み、いわば心の声を聴いて下さり受け取って下さる菩薩様です。人それぞれの苦しみに合わせて三十三の姿に変化してお釈迦様の教えとご縁を結んで下さいます。

人間にとってその苦しみの最たるものの一つは、争い事、戦争による心の傷ではないでしょうか。人間一人一人ではどうにもならない「苦」に、人は救いと癒しを求めます。

明治以来、戦没者の慰霊は名前を刻んだ石碑が中心でしたが、次第に石やコンクリートで造られた観音さまの像があちらこちらに^{こんりゆう}建 立 されるようになりました。

戦時中は人びとの苦しみを受け凜々しいお姿でしたが、戦後十数年がたち大きな像が流行する頃には、とても優しいお顔に変わってゆきます。

人々の苦しみの受け皿から、慰霊の象徴へと変わってゆき、平和を願うお姿になりました。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

観音さまは慈悲の菩薩様です。慈悲という言葉は、慈しみという文字に悲しいという字を書きます。苦しんでいる人々に慈しみの手を差し伸べて、悲しみを自分の事として受け止めて下さるのが、観音さまなのではないでしょうか。

最近では癒やしの姿でニッコリと微笑んだ観音さまやお地藏さまがお土産物としてもありますが、そのお姿の中に、長い歴史の中で多くの人々の苦しみや悲しみを受け止めて来て下さった観音さまの思いが感じられます。

『観音経』というお経にある「^{ねんぴーかんのんりき}念 彼 観 音 力」、彼の観音さまの力を念ずれば、お悟りへの救いの手、誓願に生きる道が見えて来る筈です。

私達にはどうにも思い通りにならない「苦」に直面したとき、観音さまのお姿を心の中に思い描いて戴きたいものです。

— 終 —